

Salon d' AALA

サロン

ダーラ

2019. 3. 1.

No.112

記憶に残る三光作戦

加藤 明美

関口知宏さんが、幾度か放映されたテレビ番組「中国鉄道の旅」で、乗り合わせた中国の庶民と触れ合っておられる姿に共感を抱いて見ていました。彼は乗車、下車を繰り返しながら、旅を続け、いろいろな地名の紹介がありました。ところが、湖南省の“衡陽”^{こうよう}で、彼が降り立った時、私の心は、凍てつきました。

それはここで、日中戦争時に、「三光作戦」で、日本の軍隊が、街の98%を焼いたのです。

「光」とは、“きれいに無くす”の意味があります。即ち「奪い尽くす」「焼き尽くす」「殺し尽くす」を日本軍が実行したのです。

私は、敗戦後42年たった1987年3月に当時、日本人捕虜だった人達11名で、この街にお詫びに、と250万円ほどの大きな時計を公園に設置していたと、早く予定で、寄贈に行きました。



千人の歓迎を受けた時の写真

私が、この街に入った時、先ず歴史のあるところなのに、どうしてこんなに新しく感じるのだろうか？と不思議に思いました。また40年振りで戦時中痛めつけられた日本人が来たと言うのに、日々娯楽の少ない平凡な生活を過ごしている人々にとっては、千人余の庶民の歓迎でした。

町外れでは、春3月桃源郷の如、桃のピンク、ナタネの黄、スズナの白が美しく、なだらかな丘に夢のような美しい景色が広がっていました。結婚式、お葬式にも遭遇しました。

この当時、中国は、未開放政策とあって、一般の観光客を受け入れる体制になっていませんでした。ところが、中国側の配慮で、多くの日本人捕虜だった人達を特別に許可されたのです。曾ての捕虜達は、その恩恵を受け、戦友の絆と懐かしさも手伝ってか、戦跡訪問を実現することができました。

当時の捕虜たちが、お詫びに行っているにも拘わらず、中国側は、熱烈歓迎をして下さいました。黄色い太い帯を腰に巻き付けた民族衣装を着て、“腰鼓”とあって、脇で太鼓を抱え、またドラを鳴らしての賑やかさでした。夜は市の歓迎宴を開いて下さり、市長さん達要人も多数参加されました。捕虜だったうちの一人は「戦時中は、大変なご迷惑をおかけしました。」ことなど詫びますと、衡陽の市長さんは、「侵略戦争は、日本の帝国がしたことなので、日本国民も多くの悲劇があったでしょう。」と逆に同情されました。(私の義父も戦死しております。)

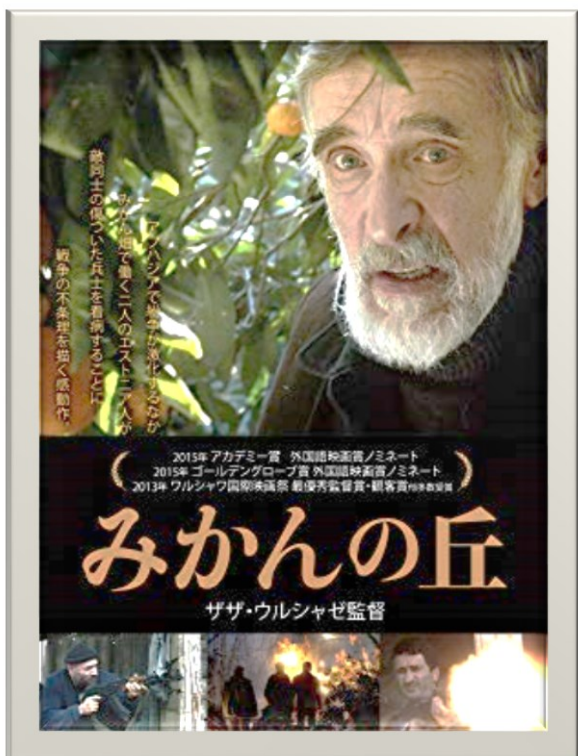
翌日捕虜だった方達とあちこち戦跡巡りをしましたが、市長さんの「日本の帝国がしたこと」の言葉は、一般の中国人からもよく聞きました。

心の広い暖かなお言葉と受け取りました。しかし私は、本心は違う中国人も多いのでは、と強く

感じました。それは、翌日、持参した戦争当時日本で作られた現地の地図を広げて、木々に囲まれた、タコ、イカ、エビ等の名称を付けられた小高い丘を捜しあて、そこで戦友を弔うべくお線香や、蝋燭を点け、地面には、お米や、お酒、タバコ等を撒いて、手を合わせておりました。すると、間もなく、どこからともなく、鍬、鎌、鋤等を持った数人の農夫達が躍り出てきましたがおりよく、丘の下には、公安局の数人が私達を監視か、守って下さってるのか、待機しておられていて、彼等の素早い対応で、胸を撫で下ろしました。

一般の中国人は、やはり、日本人に対して、恨み辛みが多くあって当たり前と思えました。帰国の前夜、蘇州で、一部屋を余分に借りて、夕食後、その部屋で祭壇を作り、幾多の戦友の遺族から預かった供物を飾り、お供えし、メンバーの中にお坊さんが居られたので、法要をしました。終わった後の深夜、それらの供物を運河に流すべく、タクシーで現場へゆき、重石を付けて沈めました。ところが、翌朝見に行きましたら、浮いているではありませんか。ショックを受けておられました。私はここ迄来てまでもこんなことをしなくてもよいのにと思ったのですが…。仕方ありません。戦争は、勝っても、負けても国民を苦しめることになります。辛い旅でした。

映画「みかんの丘」を観て



2013年 エストニア、ジョージア合作
監督：ザザ・ウルジャゼ

渡辺 敏子



ジョージア（グルジア）の西部 アブハジアでみかん栽培をするエストニア人の集落に紛争の激化で多くの人が村を離れる中残った二人（お隣同士でみかんの木箱づくりをするイヴォとみかんの収穫が気になるマルゴス）。

ある日、傷ついた二人の兵士（ジョージア兵のニカとチェチェン兵のアハソド）をイヴォの家で介抱することになるが、同じ屋根の下に敵兵がいることを知った二人は殺意をむきだしにする。イヴォはこの家の中では許さないと毅然とした態度でいう。兵士たちはいのちの恩人に敬意を払い手を出さないと約束し兵士たちの関係も次第に変化していく。

数日後、アブハジアを事実上支援するロシアの小隊がやってきて負傷しているニカや兵士でないマルゴスまでもあつという間に殺してしまう。

聞いたことはあっても、知らない国々の映画だが、イヴォが言う「何が違うんだ、みんな同じだ」というメッセージは伝わった。人間性の尊さと戦争の不条理を描いた心に残る作品だった。

スリランカをちょっと訪問

田 辺 晃 生

昨年冬、寒さにふるえ熱帯に逃げ出した。インド源流の仏教にかかわる姿をかなり残していると言われる仏跡が多く、また各時代の王朝の都、特に巨大な岩山の上に王宮を作ったといわれるシーギリアなど世界遺産のある「紅茶の国」スリランカ（旧セイロン）を訪ねたのである。北海道より少し小さい領域に 2000 万人強の人口らしい。11 世紀頃に南インドから進出したタミール王朝系の末裔が北部・東部を中心に住んでいるが、その武闘派「タミールの新しいトラ」とシンハラ人主体の政府との大規模な対立、民族的宗教的紛争の様相を呈していた 20 年以上にわたる騒乱が、10 年ほど前に武装勢力が解散して議会制の政治に参加するとの方針で終結していた。安心して熱帯地方の旅を楽しんでいたが、帰宅してから今度は選挙絡みの混乱が報道され、びっくりした次第である。

政治体制と子供たち

非同盟・民主社会主義の政治外交体制をとっている共和国であるが、確かに小中 9 年間の義務教育が無償でなされており、識字率も 90%以上ということで周辺国と比べてもかなり高いようだ。そのこととも関わって、最近の経済発展、特にインフラ整備には目を見張らせられる面がある。しかしそれを支える人材育成や将来の国の進路を考えた場合、若干気になる点がある。一つは高等教育に進学する生徒が少ないらしい。何か魅力がないのか、国の経済発展の恩恵が庶民にあまり届いていないのか？ もう一つは民主社会主義の体制といいながら、シンハラ人中心の政治運営になっている点である。驚くべきことに、タミール人の選挙権はく奪・公職追放がなされてきたようだ。長い間ヨーロッパ諸国の支配を受けてきて、やっと第二次大戦後イギリスからの独立を獲得した後、特にタミール系住民に対する“排除”を助長してきたのはなぜなのか、ヒンドゥー系と仏教系の宗教的対立があるとすれば遺憾でもあり、気になるところである。



① 学校帰りに駄菓子屋に寄って道草を楽しむ生徒たち



② おめかしして出かける子供たち



③ カジュアルな服装の子供たち

④



⑤



④何とも言えない癒しの笑顔が魅力的だ (ルワンワリサーヤ仏塔にて)

⑤マハラジャ風の一族がお坊さんの祝福を受け、それをビデオに記録している風景

南伝仏教

我々日本人は中国を經由し漢字に翻訳された仏教を学び、それを大乘仏教（衆生も救済される）・密教として教えられてきた。一方、東南アジアなどに伝播した（南伝）仏教の教えは上座部仏教（自ら修業を積んで解脱を目指す）として知られており、スリランカがその発祥の起点となっているようだ。マルコポーロの「東方見聞録」では、住民は「偶像教徒」と表現され、また外国に隷属していない独立国であり、ルビー・サファイア・水晶や真珠などの宝石産出国として語られている。今でも格安の高級宝飾品が手に入ることで有名だ。イスラム教はもちろんのこと、キリスト教も始祖（神）の姿は見られないことから、仏像をあがめているような姿からは「偶像教徒」という表現も仕方ないか。そういう意味では偶像のない信仰は極めて精神性（論理性?）が高く、それを文字化した経典も絶対的だ。それに比べて仏教は情緒的ともいえよう。ヒンズー教は様々な姿を持った神が登場するので、もっと多様な感情を表したような情動的「宗教」(?)ともいえよう。

1) アヌラーダプラ：初代王朝の都 BC5C~AD11C

仏教はインドのアショーカ王の時代 BC3C 頃に伝播したといわれ、世界遺産となっているイスラムニ寺院がある。釈迦が瞑想していた場所の菩提樹が 2000 年以上も前にここに植樹されたという。また驚いたことに、展示されている AD5~6C 頃の石板レリーフの一部に説明文としてドワーフと英語表記がなされているのを目にした。トールキンの「指輪物語」に出てくるドワーフ族と同じなのか? 何か踊っているような姿のものもある。



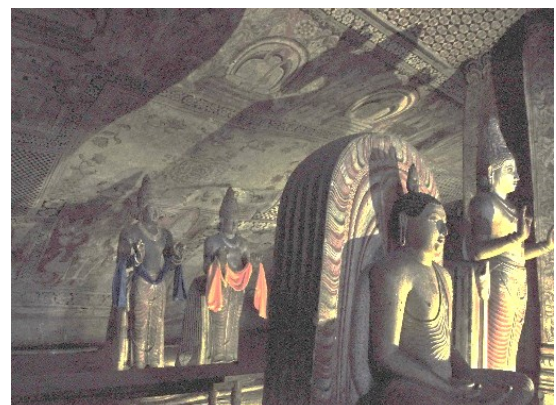
ポロンナルワ洞窟内の壁画、右の人物は
ガイドのレナード氏



アヌラーダプラのルワンワリサーヤ仏塔



出土した石板レリーフに
「ドワーフ」と英語の表示



世界遺産ダンブッラ石窟寺院の仏像と壁画

～ 次号に続く